

礼拝さいこう

「これから」に向かって

教会音楽室長 江原美歌子

「新型コロナウイルスに直面して教会は…」をテーマにニュースレターの発行を続けて6回、8つの教会の事例紹介、濱野道雄氏による応答コメントには多くの反響をいただき、コロナ感染状況の中で礼拝と賛美を考える機会として『礼拝さいこう』を楽しみにしているとの声が寄せられました。今年度は、コロナ感染の終息を見通せない中ですが、「これから」をより意識した内容でニュースレターをご提供してまいります。その初めに、濱野氏よりコロナ感染拡大の経験と諸教会の気づき、課題からみえてきたことの振り返りとして寄稿いただきました。「これから」に向かっていく中でお分かちしたいメッセージです。

もうひとつの「これから」には、機構改革の計画にある連盟の歩みがあります。この間、様々な場を設けて「教会音楽」のこれからについて意見を交換してきました。その中で、あらためて確認することは、「これまで」を総括することの重要性です。「和解のつとめに仕える」のもとどのような研修会を開催し何を学んできたか、研修推進の在り方にどのような変化があったのか、『新生讃美歌』では、編纂の歴史を経て、今何が課題となってきたのかなど検証し、次に向かっていきたいと願われています。

今号では、「これから」を意識しつつ、教会音楽カフェの参加者4名による座談会を開催しました。語り合いの経験を重ねてきたことは力と実感、最後は「わくわく」という言葉が頻繁に発せられ、希望をいただきました。「『新生讃美歌ブックレット』を用いた研修会」報告では、3つの特別委員会メンバーによる座談会の概要、座談会やグループディスカッションを経て寄せられた参加者の感想、賛美歌検討委員会委員、坂本献氏による応答を紹介しています。ほか、一つ一つの報告や発信からたくさんの示唆や問い、励ましをいただいています。ここからさらなる対話が導かれることを願っています。

世界の至るところで暴力の連鎖が続いています。主よ、あわれんでください。主の平和がなりますように、そして、「これから」に主の希望を見いだしていくことができますよう祈ります。

Index

- 1) 教会の礼拝事例紹介を振り返って～応答コメント 濱野道雄（鳥栖）
- 2) 「教会音楽カフェ」参加者による座談会
青山祐一（山形）、岩崎秀子（常盤台）、加来国生（筑紫野二日市）、菊地るみ子（大井）
- 3) 「新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」報告
- 4) 「地方連合教会音楽担当者連絡協議会」報告
- 5) あたらしい歌を歌おう 「姪浜バプテスト教会 オリジナル讃美歌集」紹介
- 6) 教会音楽室報告「『新生讃美歌』曲評価 中間報告Ⅱ」発行、著作権情報

濱野道雄（鳥栖キリスト教会、西南学院大学神学部教授）

『礼拝さいこう』19号（2020年8月）から24号（2022年3月）まで6回に渡って、新型コロナウイルス感染症拡大の影響に対して、諸教会が礼拝と賛美においてどのように取り組んでいったのか、声を聴かせていただき、私なりの応答を続けてきました。最後となる今回は、「まとめ」とはならないかもしれませんが、コロナ下の礼拝と賛美の課題、アフターコロナの礼拝（これまでと変わるもの、変わらないもの）について記してきたことを振り返りつつ、日本という島にある私たちの教会の次の一步に思いを巡らせてみたいと思います。一番初めの19号に記したように「これまでのやり方が続けられない中、それでもやり方を変えて教会の歩みを続けていらっしゃった姿を全ての事例に読みます。『教会とは何か』（久留米）、礼拝とは何か、皆さまあらためてお考えになった」、その内容を振り返りつつ、次の一步を考えたいのです。

まず私たちは「やり方」の変化を余儀なくされました。具体的には、オンラインをいかに使うのか、礼拝式の短縮等がどこまで可能か、礼典はどのように行うのか、といったことが大きな課題になりました。そして「やり方」として具体的な技術やプログラムの問題と取り組みながら、何は変えざるを得ないけれども、何は変えてはいけないのか判断する中で、そもそも賛美や礼拝、そして教会とは何かを考えてきました。そしてアフターコロナが見えてきた今、考えてきた「教会とは何か」を変えずに、しかしコロナ前に後戻りせず、これからも続けることは何か問われているのでしょうか。

教会、そして礼拝とは何かを考えてきた中で、私は「共同体性」と「リチュアル」（儀式・礼拝式・「身体で感じられるもの」）ということを考え直させられてきた気がします。これはコロナ以前から日本の教会、そしてバプテストに問われていたことが、コロナによって加

速度を付けて鮮明になったのだと思います。

礼拝のオンライン化は私たちが教会に集う意味、「共同体性」を問いました。本当に「人が独りでいるのは良くない」（創2：18）と信じているのか、です。なぜ他の教会ではなく自分の教会のオンライン礼拝に参加するのか。主の晩餐をオンラインでするかしないかの判断において、いつもの「コミュニオン（主の晩餐）において自分はコミュニオン（共同体）の一員になって」いるのか（20号）。その共同体で「離れて共なるを知り、集いて異なるを知る」（21号）、「『強さ』ではなく『弱さ』を絆としたつながり」（24号）がつくられているのか。そして教会員だけの共同体性ではなく、教会の外の地域に「『我—汝』の語りかけや集まりを配信する事で、この世界とは違うもう一つの『風景』をネットで教会の外にも視てもらう」（21号）ことで、さらに拡がる共同体を作り出そうとしているのか。

「共同体性」はコロナ前から北半球の教会では、教勢減少と関係する、大問題でした。若い世代を中心にSBNR（Spiritual But Not Religious：霊的だが宗教的ではない人々）が増えていました。神は求めるけれども、従来の宗教が受け止めきれない人たちのことです。「神は信じるけれども、教会には行かない」、「イエス様は大好きだけど、礼拝には行かない」のです。アメリカ人の5人に1人はそうで、いくつかの調査によれば、日本でもこの層は広がっていると言えるでしょう。問われているのは、「共同体性」をキリスト教は刷新できるのか、です。それを礼拝等のオンライン化は日本の教会にも問いました。

ただし、日本は世界でも独特の状況にあると思います。北半球でこの現象が進んだのは、資本主義等が進むことで共同体の意義が、良い意味でも悪い意味でも、薄れたからでしょう。共同体の意義が今も強い南半球などでは、今も教

会は拡大し続けています。ただし欧米や韓国のように、一旦教会が定着したところではSBNRと教会が、いかにお互い変わり、共に生きることができるのかの模索が続いています。しかし日本は教会が定着する前に、共同体性の後退が起こってしまっているのです。日本のキリスト教と教会はどこにもモデルを見つけられない難題に直面しているのかもしれませんが。だからこそ、「日本の神学」が今こそ必要なのだと思います。いよいよ日本の教会は本当に「自立」する時なのでしょう。

その具体的課題の一つが「リチュアル」で、これも日本のバプテスト教会に問われていると思います。もっとも日本だけではなく、アメリカのバプテスト教会でも問うている人々がいます。バプテストは「リチュアル」、儀式、見たり触ったりして感じられるものから（礼拝堂の「十字架」に至るまで）極力距離を取ってきたと思います。そこには勿論良い意味があり、それについて19号で「神と霊魂との直接的関係を主張し、教会、教職、式典等の仲保的功德を認めないこと」（『バプテスト教會員必携』1935）の言葉を引用しつつ述べました。ただしそれら身体に感じられるものに「仲保的功德」という意義付けをして後戻りするのではなく、全く別の新しい意義づけをし、固定化はせず且つ積極的にいかに位置付けられるかを探る時なのではないでしょうか。（天城山荘についても、それに替わる「リチュアル」をどう考えるかの問題かもしれません。）

コロナにおいて、やはり身体をもって集うことの嬉しさがあらためて認識されました。それも「礼拝という祝宴は、ただ感情的に楽しいというより、神に与えられたリアルな人生を喜ぶ時なのだということ」（22号）が本当に起こっているのか、これまでの礼拝に問われたのだと思います。礼拝は、賛美歌や礼典といった「リチュアル」が端的に示すように、頭や心だけのものではなく、身体の参与を求めているのです。そしてその身体性は共同体性を顕しているのです（20号）。小樽

教会の事例ですが、「3歳のお子さんが自分と同じ大きさぐらいある大きな熊のぬいぐるみを両腕に抱えて礼拝堂中央通路を前に歩いてきて…思わず吹き出しそうになりましたが…御言葉を思い出す瞬間でした。実に、ここは天つ世でしょうか、という程の上よりの愛と光が会堂に充満しているように見えました」（23号）。これが礼拝式で起こるのです。

デニス・P・ホリンガーは、キリスト教の世界観こそがキリスト教倫理を生み出し、その世界観は（聖書の）物語と、神学と、リチュアルの3つによって伝わると言います。このリチュアルの部分を、日本のバプテスト教会は、単に「儀式」に戻るのでなく、かといってそれを無視して個人主義的なSBNRに進むのでもなく、どう形にできるでしょうか。（ただしホリンガーのLGBTsに差別的に私には思える倫理の内容には私は賛成しません。それはまさに、ホリンガーと私が聖書から聴くキリスト教世界観が異なっているからでしょうし、リチュアル的に、実際にどのような人々と出会ってきたのかが違うことで生じているのでしょう。）

共同体性を求め、リチュアルの捉え直しをする、日本のバプテストの、自分たちの神学と宣教。この7月、江原室長がアメリカ・カナダ賛美歌学会で「日本のオリジナルの讃美歌」について発表なさるそうで、大変楽しみにしています。そこには日本の（日本という「国」ではなく、この「島」の「歴史」で何が起きているのか、です）リチュアルになった神学が、物語が語られるのだと思います。

今、新しい歩みが始まります。コロナによって否応なく加速させられましたし、まだ先が見えずに不安にも思います。しかし私は希望を神から頂いています。

「礼拝さいこう」 座談会

座談会メンバー

青山祐一（山形キリスト教会）

岩崎秀子（常盤台バプテスト教会）

加来国生（筑紫野二日市キリスト教会）

菊地るみ子（大井バプテスト教会）

司会 江原美歌子（教会音楽室長）

本日は、礼拝と教会音楽、「これから」について語り合うために、「教会音楽カフェ」の参加者の皆様の中から4名の方々にお集まりいただきました。コロナ感染による影響が続いていますが、この間、何を経験し、礼拝や賛美について考えてきましたか？

菊地：緊急事態宣言を受けて、教会の真価が問われた。集まっていいのか、止めたほうがよいのか？一番大切するのは何かを問われてきた。具体的、技術的な面で礼拝について話し合ったが、自身が今までになく壊されてきた経験もあった。「本当に教会に行きたいの？」「賛美歌を歌いたいのか」と、心の中をえぐられる経験をした。

青山：「礼拝するのかしらないのか？」が問われた。教会の命である礼拝を止めることをどう考えるのか？また、人命をどう考えるかも同時に問われた。個々の教会の状況が異なり、捉え方、進め方が違う中で、具体的に「主の晩餐」をどう考えるか等もつけつけられた。教会財政への影響もあった。その他交わりも含めて全てのことが当たり前でなくなったことで、どのよ

うに受け止め、行動していくのか、心の内が探られ、今もなお探られている。

岩崎：緊急事態宣言後、教会としては人命を優先した。私としては、教会の決定を素直に受け入れた。会堂での礼拝を望む方、SNSでの礼拝でも礼拝に変わりはないと思う方、それぞれの立場で考え方もさまざまであると思われる。私としては、必ずしも会堂で礼拝をお捧げしなくても、礼拝には変わりないと思った。常盤台教会では、今年の5月から地区に分けての会堂での礼拝が教会員はとりあえず30人程度の参加という形で再開するが、以前と同様に臨めるのかは未知数である。ハイブリッド式になるので奉仕の多様性が求められる。私は公共交通機関を使うので、積極的に教会に行くのはためらわれる。

司会：信仰の問題と人命の問題のはざままで苦慮された教会は多くあったようですね。

岩崎：信仰について考える時が与えられた。教会に皆さんと共に集まれないけれど、各会ともとても活発に活動をしていたので、奉仕を通して教会につながっていることは実感できた。



岩崎秀子

常盤台バプテスト教会会員。教会音楽の奉仕には直接携わっていないが、東京バプテスト神学校で、教会音楽コースを受講するなど、礼拝と教会音楽に関心をよせている。

加来：集まっていけない雰囲気がある中で、礼拝をどう継続していいのかが問われた。20年前からビデオカメラで礼拝を撮影していたため、それを切り替えて準備することができた。最初は戸惑ったが礼拝を届けるということが始まり、DVDのない人には説教原稿を届けにいった。宣言が解除され集まったときにはその交わりを喜び、「集まって」の礼拝を望んでいたのが実感されたが、今は、それが慢性化してその感動は薄らいでいる。当たり前のことが当たり前でなくなることを経験した。

菊地：教会役員の中で、社会ではどう教会をみているか等分かち合わせ、国がなるべく集まらないようにといているのに、教会が集まることの問題を相当協議した。「国にどこまで従うのか?」「礼拝は不要不急なのか?」という議論もあり、結果、礼拝は教役者だけで行い配信することを選んでいった。

司会：それらのプロセスで何が語られたかは、大きな財産になっているのではないか。現在はアフターコロナに向かっているが、これまでの経験を受けて、どのように次のステージについて考えていますか？ 以前とは礼拝が変わると思いますか？

青山：礼拝をオンラインで行っているところが増え、同時間、同じ場所で、皆で集まることが基本になっていたが、アフターコロナでは、場

所は違って時間も共有するという形になるのではないかと。賛美歌に関しては、大勢で一緒に歌うところからソロ、デュオ、トリオなどの小編成による賛美、また発声を伴わない様々な楽器による賛美、あるいは手話賛美など、会衆賛美と聖歌隊のパターンから、さまざまなスタイルが起こっていくだろう。

オンラインではリズムがずれ、一緒に歌う経験ができない。システム上で同時に歌える技術の進化を待ちたい。

菊地：技術が進化することを望んでいるが、会衆がみなで参加する会衆賛美は大切で、現在、「大井教会でのマスクをしても歌わない」選択によって会衆は多くを失っている。代表者が歌っていても、自分が声を出せないのは受けるものが違う。検討が必要だろう。

青山：賛美歌の節は短くしているが、歌詞を吟味して選びとっている。自動的に全節歌うのではなく、節を絞って歌っていくということもあるだろう。

岩崎：賛美歌を歌う時はいつも音符を追うことで精一杯だったが、現在、奏楽のみの賛美の中、映し出された歌詞をじっくり読むようになった。賛美歌を通してみことばに触れる機会となっている。

加来：コロナとは別の理由で、奏楽者不足とい

加来国生

筑紫野二日市キリスト教会
牧師。福岡連合の教会音楽
委員の経験をもつ。九州バ
プテスト神学校で2年に一度
教会音楽を担当している。
サクソをたしなむ。



青山祐一

山形キリスト教会会員。奏楽者、聖歌隊指揮者。東北連合教会音楽委員を務める。カフェには毎回教会のみなさんと誘い合って参加されている。持参されるお菓子の披露は参加者の楽しみの一つ。



う課題がある。伴奏は鍵盤楽器に限定されるかを問うてきた。コロナ後の賛美は、形態に広がりが起こされていくのではないか。

菊地：どれがいいかという選択でなく、教会としてどうしていくかは話し合っていたほうがよい。牧師、役員会の一存ではなく、将来、教会が社会の中で証しし、福音を延べ伝えていくことが大事であり、今話しあわないと今後の教会の歩みに危うさを感じる。

司会：今の若い世代の中に気候変動、社会情勢の影響もあり社会に関心がある方々が以前より増えていることがメディアで紹介されていた。近年、いろいろと経験する中で、「考え、問う」ことをこれまで以上にしているのではないか。「考える」を今回の尊い経験として大切にしていきたい。これまで「礼拝とは何か」を語り合う場を設けてこなかった。

菊地：この世に教会が立たされている意味、礼拝があることの意味を考える。自分たちだけで「集まる」「集まらない」を考えることに留まるのではなく、今、イエスさま、福音を「求めている人々」にどう発信、届けられるかを考えたい。

加来：聖書が記された時代にも疫病もあった。その時代どのように礼拝していたのか？形、やり方、方法を変える礼拝をしていたのではないか。次の時代を想定しながら、進む

べき基本は、みことばを通して、この時代にどのように適応し、判断し、礼拝していくのか、そして何のための信仰共同体なのか、神の民のあり方を問い続けることだと思う。

青山：コロナ感染拡大のはじめは礼拝、歌うことに制限を受け、対処法的にやってきたが、3年目となり、なぜ礼拝するのか、歌うのかが考えられるようになってきた。

この状況でカフェがはじまった。この時に何ができるのか？ズームがあり、つながりを大切にしてきた中で、とても有意義な集いとなっている。

司会：20年9月の地方連合教会音楽連絡協議会で、今、語り合うことの大切さを知らされたことがカフェのきっかけ。連合や音楽担当者の枠を超えて、任意で集まれる場所を願い「カフェ」と命名した。ゆるく、毎回トピックを挙げて語り合っている。

加来：連盟事務所で集まるのと違って、それぞれ立場や意見が違って、広がりがある。もっと前からやっていればよかった。

司会：ズームのおかげ。これまでズーム、スカイプの存在は知っていたが、ここまで日常のことになるとは想像していなかった。

岩崎：教会音楽に携わっていない人でも歓迎とお聞きし参加した。ズームによる全国の方たちとの分かち合いは楽しい時間である。ズー

ム経験があるのでスムーズに参加できた。

司会：毎回、青山さんは山形教会の方を誘ってくださっていますね。

青山：カフェは語り合う、聞き合う、情報交換、他の教会の方々との、教会音楽担当者との交わりを通して仲間づくりができる。山形教会では礼拝で集まることができていたが、交わりが乏しくなった。教会音楽関係者は孤独になりがちなので、「カフェ」では、このような悩みを寄せ合うことができ、横のつながりがあり、工夫なども聞け、アドバイスも受けられる。「カフェ」というタイトルもあって参加しやすいので、声も掛けやすい。

司会：山形教会の皆様の持参される「おやつ」を、毎回楽しみにしている。教会の参加者の感想は？

青山：いろいろな教会のやり方、考え方、受け止め方を聞けて、発見があると、参加者からは感想が寄せられている。教会から参加したい方が多い。Zoomに慣れてない方が多いので、グループで参加している。

菊地：毎回あたらしい方が入ること、地方の方々と出会えることが嬉しい。教会の現役の方々を誘うのは難しいが、カフェの存在が励みになっている。「教会音楽」というネーミングだからこそ楽しく集まれているのでは？今後

はカフェで研修会開催も可能ではないか。

加来：教会にポスターを張っていたら、関心を寄せてくださった方がいた。教会にもニーズがあるのではないか。

司会：カフェで難しいテーマはありましたか？

菊地：「主の晩餐式」は自分達の具体とつながりにくかった。カフェも3回目で、コロナであたふたしているときで、「ゆるい」コンセプトの中「神学する」ことにはハードルがあったのかもしれない。語り合いの経験を重ねてきているので、これからは神学的なテーマを扱っていくことは可能になってきたのでは？

司会：日頃、「主の晩餐」について学んでいないので、勝手なことは言えないと感じられていたのかも。

岩崎：テーマで難しさは感じなかった。東京バプテスト神学校でご一緒した方々、先生方とお会いできるのが嬉しかった。どのテーマでも私なりに話せばよいので、諸教会の皆さんと画面上ではあってもお会い出来ることが楽しみであった。

司会：みなさんの考え方から刺激をいただき、あらたな世界に出会っていく機会ともなっている。初参加者には、語り合いに入れるように、配慮している。

加来：それぞれ動機があって参加しているので



菊地るみ子

大井バプテスト教会音楽主事。元教会音楽専門委員。連盟主催の礼拝音楽研修会等では、奏楽者や合唱のクラスを担当。東京バプテスト神学校講師。

はないか。ある賛美歌をYouTubeで配信した際にトラブルを経験し、著作権等、新しい情報を得る必要性を知らされたことがきっかけだった。皆さんの動機を聞いてみたい。

機構改革についてカフェでもとりあげてきました が、いかがでしたか？

青山：内容を理解しないと話せないし、青写真が見えない中で話すのが難しかった。特に、はじめて参加した方にとって難しかったと思う。

司会：「機構改革」のテーマでは、「わからない」と率直に語り合いができ、それを通して改革の中身を理解していくことが目的だった。これまでの体制ではない形で、教会音楽の働きをつないでいけるのかは、私の中では大きなテーマ。

加来：機構改革は漠然としていて、決まっていないことが多いので、今はキャッチボールしている段階と捉えている。テーマによっては時間をかけたほうがよい。その選別はどうなっているのか。決まっていないことを話し合うのは難しい。3歩進んで2歩下がる中で、理解が深められていくのだろう。

司会：これまで専門委員会議や教会音楽カフェで出された要望を受けつつ、「これ連」委員と対話を重ねている。常設委員会の中の研修委員会と実務チーム、地方連合教会音楽担当者会議、教会音楽カフェの位置づけ等、教会音楽の働きについて検討されている（第6回「みんなでこれ連」）。

加来：現場から、教会音楽の疑問・質問、著作権のこと等はどこに聞けるのか？『新生讃美歌』、楽譜、隙間の部分はどこなのか？落ち

ることなく拾ってくれるところはあるのか？

青山：「教会音楽カフェ」は常設委員会のサポートや、隙間を埋めるための協力は可能ではないか。旗振り役にはならないだろう。よろず相談的な存在ではありうる。

4/21に開催された「地方連合教会音楽担当者連絡協議会」の中では、地方連合の差があるが、連合の教会音楽推進者が集まっていた。集まっている人たちの働きが集約している協議会と、ゆるく集まっているカフェとは性格で異なっているので、その棲み分けが必要だろう。

司会：以前、東京近郊で教会音楽研修会を有志で企画し開催したことがある。必要性に迫られて、これをやろう！としてやったほうがわくわくして臨めるかもしれない。

『新生讃美歌』の賛美歌を共有することで思いをあわせ、協力伝道が支えられてきた側面があるのではないか。財政が厳しいからできないという考え方でなく、運動を起こしていけないか？

青山：これからは運動を起こして発信するという流れになるだろう。機構改革の中で「発想ぐせ」を持ちながら意識していくことが求められるだろう。

司会：これまで南部バプテスト連盟の支援の恩恵に被ってきた歴史があったが、これからは無いところから発想することで、やってみようと思いが起こされていくのではないか。

岩崎：教会音楽に関わる方が発信すれば、ほかの活動グループも起こされてくるだろうと思われる。「みなこれ」には、教会内でも連盟に関わっている人だけが参加している印象が

あり、「みなこれ」のことを知っている方は少ないかもしれない。教会全体として連盟に連なる教会という認識が弱いように思われる。連盟に皆が関わり協力していく気運が醸成されるとよいのではないか。協力伝道を通しての他の教会の方々との交わりや情報交換から励まされることは多いと思う。

菊地：礼拝がある限り、神様の栄光をたたえ限り、教会音楽室がなくなっても、私たちにも何かできるはず。

加来：声をあげる場が欲しい。うずくまるのではなく、悩んでいる人がいれば、共有できる場をつくっていききたい。教会音楽カフェは「ひろば」と考える。

司会：最後にひとことずつどうぞ。

青山：どんな時代でも賛美はなくなるらない。賛美することは礼拝することであり無くならない。形は変わるかもしれないが、賛美を通しての信仰告白はあり続ける。

岩崎：現在、賛美できないことの寂しさもありつつ、今回の経験を通して礼拝の見方が変わってきた。賛美歌の礼拝での位置付けや、礼拝の中での重要性など受けとめ方が変わってきた。教会音楽はムーブメントを起こせる

可能性を秘めていると思う。教会音楽カフェを通して、参加者の皆さまと「これから」を語り合い、わくわくできれば嬉しい。

加来：筋肉も使わなかったら衰えていく。賛美もしていないと衰えていくのではないか。個々の集まりによって個性は違うが、自分達が捧げている群れとして、どれが最適か求め続けていきたい。年間主題、オリジナルメロディーを募集したことで、あたらしい取り組みができた。何ができるだろうかと発想していきたい。賛美の筋肉を衰えないようにしたい。

菊地：大井教会も新礼拝堂が与えられ、再構築、信仰もあり方も再構築する時だろう。ローマ5：5「希望は欺くことがない。」という方向で歩んでいる。教会音楽も教会全体のこと。変わらない方、神様に何を捧げていくのか。賛美されるべき方、賛美する価値がある方だから、そこにかけていく、そこに希望がある。神さまがくださったことに「わくわく」... そういう循環にしていきたい。教会音楽から教会のすばらしさ、福音の豊かさを広めていきたい。



「第3回 新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」 報告

2022年5月17日（火） 19：00～21：00 [Zoom] 参加人数:40名

2016年に発行した『新生讃美歌ブックレット』をさらに用いていただきたく、また、集まることに制約があっても、オンラインであれば学びあいの機会を提供できるのではないかと考え、昨年11月から「『新生讃美歌ブックレット』を用いた研修会」を開始しました。第1回目は「『新生讃美歌』の特徴」、第2回目は「礼拝と会衆賛美」「ミーター、曲名」をテーマに学びましたが、第3回は、ブックレット第1章6の「賛美歌とことば」をとりあげ、その中の「特別委員会対象アンケート」とその後について、3つの特別委員会の方々をお招きして「座談会」形式による意見交換と参加者による分かち合いを行いました。最初に、部落問題特別委員会の片桐健司さん（品川）、性差別問題特別委員会の岡田富美子さん（那覇新都心）、今井朋恵さん（今治）、ホームレス支援特別委員会の麦野達一さん（福岡西部）から発題をいただきました。片桐さんからは、部落差別を無くしていくことに加えて、様々な差別について考え活動されていること、何気なく使っていることばが人を傷つけていることに敏感であることの促し、アンケートを機会にことばの検証ができ意識するようになったことが語られまし

た。岡田さんからは、「たとえ小さな言葉であっても蓄積されたときに、生きる力となるか、刷り込みになるかの分かれ道となるため意識していきたい」、具体的に「雄々しく」や、「父なる神」の性別や自らの限定された父のイメージと結びつけることの課題性について、今井さんからは、いろいろな背景を持つ人々が歌い易い賛美歌の普遍性の求め、「家庭」や「結婚」、「母」「女」の賛美歌の言葉で表現されている価値観について、女性の抑圧されてきた歴史と関連づけ、キリストの愛を贖罪論で語ることの妥当性、どのような人たちが賛美歌を選び作ってきたのかの問いかけがありました。麦野さんからは、支配者の視点による歌詞、「罪びとよ!」と呼びかける賛美歌の問題、「われら」と「われ」「わが」のバランス、どこに立って信仰告白をするのか、礼拝でどうわからあえるかが語られました。「座談会」の動画・資料をご希望の皆様にはご提供しますので、教会音楽室までお問い合わせください。後半はグループと全体での分かち合いという内容でした。以下、参加者の感想をご紹介します。その一つ一つのコメントから、対話が豊かにされたことを感じ取ることができると思います。（江原）

〈座談会参加〉 岡田富美子（那覇新都心・性差別問題特別委員会）

「モヤモヤもっている」

神さまにささげる「さんび」を囲んで集い、わいわいがやがやあっという間の2時間でした。賛美歌を選ぶ方、賛美する方、賛美歌をつくる方、などの参加者です。

戦時、「戦意を高揚する歌をつくってくれ」と軍が音楽家に頼むテレビ場面をふと思い出しました。利用もされる歌でもあります。賛美をつくる方の信仰もしみ込んだ賛美歌ですから、そこには良いも悪いも、いろんなものがしみ込んでいでしょう。

グループディスカッションで印象的だったのは、「2016年天城山荘での礼拝音楽研修会『賛美歌ことばのフォーラム』以来、ずーっとモヤモヤ

もっています」「いろいろな差別、社会的問題のある今を生きるわたしたちにふさわしい賛美とは」「ことばの課題は賛美歌だけの問題ではなくて、聖書にだって使われている言葉でもある」

「『新生賛美歌』の完成していないところが魅力的」「この時期、改めて『礼拝』ってなんだろう、と考えさせられ、みんなで学んだ」「ただ歌うことが多く、多角的に歌詞の背景とか、神学的なことを考えたことがなかった」「〈性差別〉の指摘の「雄々しくあれ」が問題なら、『ますらお』もですね」などで、どれも、考えさせられるものでした。

復帰（再統合）50年を迎えた沖縄から参加した私は、戦時に向かう流れを止めるための賛美をしたいと思った。

「新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」 感想から

研修後のアンケートで参加者から寄せられた「感想」の一部をご紹介します。

●分かれ合いの中で、どの曲を歌っていいのかと思ってもやもやしてしまうという声がありましたが、私は反対に、これまで何の疑問もなく歌っていた自分にハッとさせられました。とても良いもやもやをいただけたと思いました。

●発題の中で、「どこに立って歌っているか」という言葉がありましたが、発題を聞きながら、私は「誰と共に歌っているか、歌おうとしているか」ということを考えさせられました。それは「誰と共に礼拝を献げているか、献げようとしているか」という問いであり、そして、「誰と共に生きているか、生きようとしているか」という問いでもあると思いました。賛美歌について考えることは、礼拝について考えることであり、私達の生き方について考えることでもあるなと思われました。

●「ことば」は人を理解し、人を励まし、人を幸せにする大事な手段ですが、その気は無くても（無意識の）差別している（それによって苦しんでいる方がいる）ということに気づき意識を持てたことが一番の収穫でした。私たちは間違いを冒す者であるということを常に心して、知らないことを知ることによって新たなスタートも出来る。多様な人が共に生きる今日、神様を心から賛美し恵みをどんな方とも分かち合える・楽しい賛美歌を期待しています。私たちに

は聖書のみ言葉と同じ位に賛美歌は大切なものです。

●特別委員会の方々の対談は、一つのことに様々な面からの光を当てて考える、示唆的な機会でした。

ブレイクアウトルームで、具体的に1曲を取り上げて賛美歌検討をしてみる、ということをしてみるのも一案かなと思いました。

賛美歌のことばは、自分自身の、教会の信仰の告白だなあと改めて実感しました。参加できて感謝でした。

●言葉は変化するものだから、「かつては問題とされなかった言葉」で「今、傷つく人がいる」という場合には配慮すべきと考えるが、「現代では問題とされないが、本来の意味や用法から、現代でも使用を控えるべき」というのはいまだ腑に落ちないでいます。

キリスト教用語でさえ、それが世間で使用されるとニュアンスが変更されることは、「プロの洗礼」のように「集団に参加したことに伴う通過儀礼」の意味が付加されているし、信心へのいじめの意味で「洗礼」と使われることもあります。



「新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」

『新生讃美歌』には、人道的にというよりも信仰的に歌えないと感じる曲もあるので、そうしたテーマも取り上げてほしいです。

●『新生讃美歌』は20年を経て、ようやく手垢がついて来たのではないかと思います。何がないとかこれは無理とかいう話も、使ってみないとわからないことですし、皆さんがそれぞれ礼拝にグリップしているからこそ言える言葉なのでしょう。そういう意味では、20年前とは礼拝が変わって来たということが実感できました。集まる人たちが変わり、宣教のあり方が変わり、もちろん時代も変わって来ました。そのような中で、『新生讃美歌』を透かしてみると、わたしたちの変化も自ずと見えて来たのではないかと思います。バプテストとして『新生讃美歌』を作って来たわたしたちが、次の『新生讃美歌』を作るのもアリなのでしょう。残念ながら、グループの中でも「歌える賛美歌を作ってください」という発言がありました。やはり信徒運動として「わたしたちが作るのだ」というところまでは来ていないバプテストの姿も見えてしまいました。途上にあるわたしたちだからこそ、批判を受けつつ、最高の礼拝を作るために、わたしたちも変わっていかなければならないと思います。またこのような研修会を重ねてゆきたいと思います。

●賛美歌はその時の社会状況によつての言葉で翻訳されたり、作られたわけだから尊いし、感謝です。だからこそ今の時代状況にあった言葉に代えることも必要だと思いました。新しい賛美歌も入れてほしいし、作ってほしいです。

いろいろな人の立場や状況などを想像し、一つ一つの言葉を吟味することの大切さを気づかせてもらいました。時代が変わる。賛美が変わる。礼拝が変わる。こんな言葉が刺激になりました。

●様々な差別について詳しくはわかりませんが、今回はそれぞれの立ち場から考えをお聞きする事ができ、これからはいろいろな配慮、視点が必要だという事は良くわかりました。ただ「雄々しくあれ」の反対は「女々しい」だからあり得ない、とか、「小さきもの」は上から目線とか、私にはやっぱりちょっとしっくりきません。差別的な言葉が使われたままの賛美歌はダメな賛美歌なの？と、モヤモヤしています。

「時代に合わないなら時代に沿った新しい賛美歌を作れば良い」と話した方もいましたが、それは誰にでも（今までの賛美歌に慣れ親しんできた方たち、特に高齢者も）歌える賛美歌になるのでしょうか・・・。

賛美歌によって誰もが不当な扱いを受けないように、どの賛美歌を歌おうがお互いの立場を知って理解を示す事が大切なのでは？と思ってしまいました。

●賛美歌にまつわる研修会は、音楽メインとなりがちですが、賛美歌は歌詞（ことば）と曲とからなっていることを考えると今回のような「ことば」を吟味する研修会が、もっともっともっと行われていいと思います。チャレンジしてくださって、また参加させていただき、良かったです。ありがとうございました。

賛美歌について、多角的な検討と学び・吟味が、これからも続けられていきますように。検討・学び・吟味が、多様な人たちに開かれて、みんなの事柄となっていくように、願っています。

「第3回新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」を受けて

「新生する」「賛美歌」として

賛美歌検討委員会 坂本 献（所沢キリスト教会）

「『新生讃美歌ブックレット』を用いた研修会」に多くの方々が参加し、意見や感想をいただいていることを感謝いたします。

『新生讃美歌』が2003年に発行され（準備は更に以前）、来年で20年。私共を取り巻く社会状況と私共の歩みは変化するのは当然でしょう。そして、今、『新生讃美歌』の内容を改めて話し合い、信仰の表明としてふさわしくない言葉、バプテストとしてふさわしくない信仰表明等、多くの意見を頂いておりますし、私共もその内容に共感しております。

その内容は多々に及びますが、今日は二つの視点を挙げます。一つは「教派性」。例えば「聖歌」にはホーリネスの信仰が流れており、「きよめ（聖め、浄め、清め）」等の言葉は、私共の教会で用いる言葉としては乖離があり、私共はその内容を違う言葉で表現していきましょう（もちろん、重なる他の影響＜文化・社会制度・思考等＞もあります）。

もう一つは「時代性」（もちろん重なる他の影響＜上記＞あり）。私共が使っている信仰の言葉と乖離している言葉の問題。海外の言葉が訳され、用いられた時に「天皇制」や「古文」等からの言葉の影響を受けている「君」（きみ）、「み座」（みざ、みくら、さらに「おお

みくら」）等たくさんあります。そこにはキリスト教が日本で伝えられた時の状況と、その後の時代の中で修正できなかった私共が悔い改めるべき内容があります。

バプテスト（連盟）は「新生」が大事なテーマでしたし、「新生」は聖書的根拠も含め、我らの信仰の一つの柱です。日々、主なる神の導きとみ言葉により、信仰が新たにされることです。間違いを犯してしまう我らであります、「誤り」に気づかされた時、「悔い改め」、神の思い（神の義）を求めて歩みを修正する、その繰り返しこそが、我らの信仰の歩みです。完全でないことを認め、変化できる可能性に満ちた歩みが「新生」です。

『新生讃美歌』ならば、誤りに気付いた時、「悔い改め」で「修正」されなければなりません。「出版物」として固定された時、その自由が奪われるように思いますが、そこで留まることなく、真に「新生」する者達の果実の一つとしての「うた」を目指したいのです。そうでないと「新生」しない「信仰」になります。どうしたら新生する『新生讃美歌』としていけるのか、そこに私共の「信仰の歩み」が問われているのだと思います。

「第3回新生讃美歌ブックレットを用いた研修会」座談会



2022年4月21日（木）ズームを用いて「地方連合音楽担当者連絡協議会」が開かれ、全国13地方連合の音楽担当者（または代理）がweb上で互いに顔を合わせて話すことができ、励ましと情報交換の時となりました。教会音楽室が準備した以下のアンケートにお答えいただき、それを分かち合うような形で進められました。

1. 現在の地方連合の教会音楽の取り組みについて

コロナの影響を受け、活動があまりできていない、休止しているという連合も多かったが、メーリングリストを作成し、横のつながりを深めようという取り組み、教会音楽室で開催されているオンライン研修会や教会音楽カフェの情報を連合内で分かち合われたり、連合として「新生讃美歌ブックレット」を用いたwebでの研修会を企画されたこと等が報告されました。

北関東連合では、アンケートによりオンラインでの奏楽研修について高い関心があることがわかり、音楽奉仕者のネットワーク構築の願いが「きたかん奏楽者ひろば」の発足につながったとの報告があった。「ひろば」は隔月第3土曜日20：00～21：00にもたれ、各教会での礼拝の様子や、使用している讃美歌、奏楽曲などの情報交換、特別礼拝（クリスマス・イースター）における讃美の工夫、奏楽の技術的な悩みの共有、相互アドバイス、分かち合いがなされている。奏楽者同士の交わりが楽しく、また互いの励ましになっているという手ごたえを感じている、とのことでした。

2. 機構改革後懸念される課題

各連合から出された課題の一部をご紹介します。

- ・研修会や新しい讃美歌の紹介などさまざまな情報発信はどこが担っていくのか。
- ・全国の教会音楽奉仕者、諸教会、各地方連合をつなぐ働きはどのように継承されるのか、情報交換の場の確保はどうなるか？
- ・著作権の申請に関する問い合わせや困ったときに相談できる場所などのカスタマーサービスの役割はどこが担うのか。
- ・新生讃美歌の今後の讃美の言葉の検証や改訂にむけた継続的な働きの懸念。

バプ連教会音楽室は、バプ連の資源であり財産である、という意見もありました。

3. 今後、連合として、教会音楽の働きで取り組んでいきたいこと。

どの地方連合も奏楽者の育成、研修の必要性が報告され、奏楽者同士のネットワークを深めて、互いに励ましあえるようなつながりを望んでおられ、奏楽者がいない、または足りない教会では奏楽者を派遣するようなネットワーク作り（特に葬儀の時）を模索していることが報告されました。ある連合内では高齢化や奉仕者不足が切実で、連合内での交わりもままならない現実があるという声も出されました。連合の集会で歌ったことのない讃美を一緒に歌ったり、普段聞くことのない伴奏、演奏、讃美などを聞く体験をすることで、各教会の刺激となり、教会音楽が少しでも豊かになる一助になればと願う連合もありました。

教会音楽室としては、今年度内にもう一度「地方連合音楽担当者連絡協議会」をもち、機構改革後に向けたよきネットワーク作りを構築していきたいと考えています。

北九州地方連合 泉選也（下関バプテスト教会）

教会音楽委員長を引き受けたばかりの身としては、他の連合の状況を知ることができて非常に有り難かったです。

「今年度はどんな活動をするか、コロナ危機もまだ終わらないし予定が立てづらい」と自分の内にはアイデアがな

い中で、「他の連合ではこんなことが行われた、こんな仕方で集会を持った」という情報交換は、良い刺激になりました。特に中国・四国地方で開催されたオンライン賛美集会はその一つで、通常オンラインでは通信におけるラグがあるので一緒に歌ったり楽器を演奏するのが難しいわけですが、それを逆手に取ってミュートのON/OFFを切り換えながらリレー形式での賛美が行われたようで、面白い試みだなと思いました。また、連合によっては教会音楽の委員会や担当者が存在しないところもあり、地域ごとに人的リソースなどの格差があることを改めて知らされました。

機構改革によって専門委員会が無くなることへの不安や懸念が今回の連絡協議会でも色々と出されましたが、そのような地域への支援は可能なのか、「こんな形でのフォローだったら改革後もできるのではないか」ということも検討すべきテーマの一つではないかと思いました。



神奈川地方連合 高砂久美子（湘南台バプテスト教会）

13地方連合の方々のお話しは、神奈川でしか活動していない私にとって大変勉強になりました。教会音楽部長をお引き受けして4年目になり、音楽部の活動も当たり前の事として行ってきましたが、この事がどれだけ恵まれた事だったのかを知らされました。連盟の音楽室もそうです、何かあれば直ぐに相談出来る存在の音楽室には色々な事をお聞きし助けていただいていたいました。

その部署が無くなる事は今後どのような問題が発生するのかと、皆さんのお話しを通して考えさせられました。コロナの状況下で、礼拝・賛美・集会の形態が大きく変わり不便な時期を過ごした中で、このようなリモートでの話し合いが出来るようになった事は大きな収穫と思います。今まで全く存じあげなかった地方連合の兄弟姉妹と繋がり、これからはもっと、助け合い励まし合うことが出来る様になると思いました。教会音楽の必要性を語り、問題点を相談しつつ解決できるようになれば、教会音楽の未来も見えて来るのでは？と皆様の声の中に希望を見たような気がいたしました。



地方連合教会音楽担当者協議会

西九州地方連合 嘉手苺夏希（長崎バプテスト教会）

協議会では、それぞれの地方連合の取り組みや展望・課題が分かち合われました。みなさんの取り組みに「すごいなあ！」と感嘆しました。その一方、各地方によって置かれた状況の違いを感じる時となりました。

また、教会音楽室の働きのこれからについて、連盟の機構改革とともにどうなるのかということも、研修会の開催について焦点を絞って議論が交わされました。

今わたしが所属している西九州地方連合では、無牧師教会がいくつかあります。また高齢化に伴う奉仕者の減少が以前から課題ではありましたが、コロナ危機の中で加速しているように感じます。このことは、これから日本全体の課題となってくるのではと思います。

その中で、賛美の喜び溢れる礼拝を目指して、連盟としてできる教会音楽研修とは、地方連合の音楽委員としてどういった働きができるのか、集中して考える時となりました。

現状を把握して受けとめ、その中でできることをしっかりと取り組みつつ、先を見据え一歩先をチャレンジするにはどうしたらよいか、これから続けて考えていきたいと思っています。



●「教会音楽カフェ」 これからのスケジュール紹介

第11回 2022年8月2日(火) 13:00～15:00 テーマ:「こんなことやってます♪(´▽｀)」

第12回 2022年10月4日(火) 19:00～21:00

第13回 2022年12月6日(火) 13:00～15:00

第14回 2023年3月7日(火) 19:00～21:00

毎回**事前の申し込み登録**が必要です！

テーマをご確認ください。ご参加ください。

⇒「教会音楽カフェ」参加申し込みフォーム <https://forms.gle/nrHGKbSeYsPRfVC87>



●「『新生讃美歌ブックレット』を用いた研修会」

第4回 2022年9月3日(土) 13:00～15:00 「賛美歌とことば」第2弾！

第5回 2022年11月1日(火) 19:00～21:00

第6回 2023年2月4日(土) 13:00～15:00

⇒「『新生讃美歌ブックレット』を用いた研修会」参加申し込みフォーム

<https://forms.gle/p63ZsLieNUe3MGkj7>



あたらしい歌を歌おう



横浜バプテスト教会の岩下星南さんから、教会オリジナル讃美集発行のご連絡をいただきました。歌集の「はじめに」から以下ご紹介します。

鈴木牧人氏（横浜教会牧師）はコロナ感染と緊急事態宣言下の中「これからどうなってしまうだろう」と心が騒ぐ中で、聖書日課のみ言葉が心に迫り、ある御言葉の賛美が沸き上がり、平安が与えられた経験をされました。それがきっかけとなり、集まって賛美ができない中、それぞれの場所で御言葉を心に刻み、賛美を捧げるために、オリジナル賛美歌を作ることを思いつかれました。教会員の岩下さんの協力により、教会の年間聖句を用いたオリジナル讃美第1号が生まれ、一年の中で合計5曲の賛美歌が作られ、この歌集発行へと導かれました。

主を喜ぶこと、賛美することを、信仰の基に据えることの大切さを教えられたそうです。

5つのみことばの賛美

- 1 「希望のうちに生きる」
（使徒言行録2：25-26）
- 2 「約束してくださったのは」
（ヘブライ10：23-25）
- 3 「命の道」
（使徒言行録2：25-28）
- 4 「ヨハネによる福音書3：16」
- 5 「愛は、すべてを」
（コロサイ3：12-14）

希望のうちに生きる

使徒言行録2:25-26

岩下星南

わ た し は い つ も 目 の ま え に 主 を 見 て い た 主
が わ た し の み ぎ に お ら れ る の で わ た
し は 決 し て ど う よ う し な い だ か ら
わ た し の こ こ ろ は た の し み し た は よ ろ こ び た え る か ら だ
も き ば う の う ち に き る で あ る だ か ら き る で あ る

みなさまの教会では、どのような取り組みがこの間なされてきたでしょうか。

ニュースレターでご紹介しますので、ぜひご一報ください。

歌集をご希望の方は横浜バプテスト教会（092-881-0383）までお問い合わせください。

1冊500円+送料となります。

『新生讃美歌』曲評価「中間報告Ⅱ」発行

賛美歌検討委員会議では、2008年発足より『新生讃美歌』（2003）の曲ごとの評価を開始し、これまでに219曲までの作業にあたってきました。この働きは「新生讃美歌フォーラム」（2005）で、将来の『新生讃美歌』（2003）改訂を見据える中で「賛美歌研究を今から始めること」の提言が契機となっています。この曲ごとの評価に加えて、賛美歌検討委員会議の主な取り組みとしては、曲評価から与えられた課題を取り上げた研修会（天皇制用語、賛美歌編纂について）の開催、特別委員会対象「新生讃美歌アンケート」の実施と課題共有、『新生讃美歌』の参考資料として『新生讃美歌ブックレット』の発行など、多岐にわたる研究・活動を行ってきました。



「中間報告Ⅱ」は、「中間報告」（1番～100番）に続く第2弾として発行するもので、101番から200番を対象とした評価報告書となっています。評価作業の目的は、『新生讃美歌』で採用された賛美歌を通して「バプテストのものさしとは何か？」を求めることにあり、賛美歌検討委員は「一バプテスト」、「一信徒」として、教会で養われてきた聖書理解や信仰生活、さまざまな礼拝と賛美経験から語り合い、私たちの賛美歌の「ものさしとは何か」の検証に努めています。報告書をご一読いただき、諸教会・伝道所の礼拝と賛美にご活用いただければ幸いです。

「中間報告Ⅱ」では、伝統的（標準的）賛美歌、福音唱歌、バプテストの賛美歌、ことばの課題、子どもの賛美歌、クリスマスの賛美歌の項目だてで報告しています。上記のQRコード又は連盟ホームページからダウンロードすることができます。（『中間報告Ⅱ』一部「まえがき」より）

著作権 情報！

3月16日に「著作権情報交換ミーティング」をオンラインで開催しました。これは、日頃より著作権情報を寄せてくださる方、問い合わせをいただいている方々に声をかけ、有志で現在の著作権の課題や新たな情報を交換する目的で集まったものです。

今回はニュースレターN023で、田坂元彦さん（横浜ニューライフ）より紹介されたCCLI（国際キリスト教著作権協会）の利用とその後についてご報告をいただきました。CCLIは、教会の規模別に設定された年間登録料を支払うことで、CCLI管理下の主に英語圏の楽曲を自由に利用できるシステムです。『新生讃美歌』収録の英語から翻訳された賛美歌の多くを同社が管理しています。

ミーティングでの質問から調査し分かったことは、日本バプテスト連盟が包括団体としてCCLIに登録することはできないこと、外国曲であっても日本国内で管理されている曲はJASRACを通して許可を得る必要があることです。朗報は、『新生讃美歌』で多数著作権許諾を得ているCopyCare社管理の楽曲（例：21番「栄光と賛美を」等多数収録）は、CCLIで申請できることが分かったことで、A教会ではこの春からCCLIに登録し、海外にある同社事務所へ直接申請手続きをとらずに、使用することができるようになったそうです。

最後には、諸教会の礼拝賛美のために、連盟として著作権の課題に取り組んでほしいとの要望が出されミーティングを終えました。協力伝道としてどのようなサポートができるか、引き続き検討していきたいと思います。著作権情報交換ミーティングは年内に再度開催を予定しています。次回参加希望の方は、教会音楽室までお問い合わせください。048-883-1091